

# 九鬼周造の偶然論について ——様相論理からのアプローチ——

文学研究科哲学専攻博士後期課程満期退学

萱間 暁

## [0] はじめに

【要旨】 本論文は、様相論理から見た九鬼周造の偶然論について論じる。本論文では、まず様相論理の観点から偶然性を定義する [1]。次に九鬼周造の存在論を [2]、そして様相論理の観点から九鬼周造の必然論を [3] それぞれ簡潔に概観する、さらに必然性の否定としての偶然に関する九鬼周造の偶然論が様相論理を利用して議論される。このとき「偶然とは必然の否定である」という九鬼の主張は偶然性の定義にはなり得ないことをやや詳しく分析する [4]。最後に九鬼周造の偶然論についての特徴を述べてから、「九鬼の偶然論は《必然性優位の偶然論》である」という結論を記す [5]。なお、本論文では、『人間と実存』所収の2つの論文「哲学私見」、「偶然の諸相」を主に扱い、九鬼の主著である『偶然性の問題』等は適宜参照することにする。なぜならば、この2つの論文は九鬼周造の存在論、必然論、偶然論、そしてそれらの関係が明快かつ簡潔に論じられているからである。

【キーワード】 様相論理、存在論、必然論、偶然論、偶然性、九鬼的偶然性、必然性、可能性、不可能性。

## [1] 様相論理の偶然論

九鬼周造は、「偶然と運命」という講演の中で

「①必ずあるという必然的なことでもなければ、決してないという不可能なことでもなく、

②あることもないこともできるというところが偶然になくってはならない」<sup>1</sup>

と論じている。これを偶然性の定義と見なすことにしよう。Pを命題<sup>2</sup>とするとき、①は次のように表現できる；

$$(1) \quad \nabla P \equiv (\neg \Box P \wedge \neg \neg \Diamond P)$$

[Pが偶然であるとは、Pは必然的でないが不可能でないということである]

ここで、「 $\nabla$ 」は偶然性の、「 $\Diamond$ 」は可能性の、「 $\Box$ 」は必然性のオペレーターを、「 $\equiv$ 」は

同値を,「 $\wedge$ 」は連言(かつ)を,「 $\neg$ 」は否定(ない)を表わす命題結合子である。二重否定を除去すると,(1)は,

(2)  $\nabla P \equiv (\neg \Box P \wedge \Diamond P)$  [Pが偶然であるとは,Pが非必然でかつ可能なことである]

となる(図1参照)。さらに,

(3)  $\neg \Box P \equiv \Diamond \neg P$  [Pが必然的でないこととPでないことの可能性は同値である]

が成り立つから,選言肢を入れ替えて(2)を同値変形すると,

(4)  $\nabla P \equiv (\Diamond P \wedge \Diamond \neg P)$  [Pが偶然であるとは,PであることもPでないこともできることである]

となる。この(4)は②の定義である。

様相論理的には,(2)から分かるように偶然性とは必然的でない可能性のことである。可能世界意味論の立場から言えば,(1)は「Pが偶然であるとは,少なくとも一つの可能世界でPが成り立っているがすべての可能世界でPが成り立っているわけではない」ということを表わしている。

(4)より,以下のことが言える;

(5)  $\nabla P \rightarrow \Diamond P$  [Pが偶然ならばPは可能である]

ここで,「 $\rightarrow$ 」は仮言(ならば)を表わす命題結合子である。(5)は「偶然性は可能性である」ということを示している。(2)より,

(6)  $\nabla P \rightarrow \neg \Box P$  [Pが偶然ならばPは必然でない]

が成り立つ。これは

(7) 偶然は必然ではない

ということを示している。(4)より,

(8)  $\nabla P \rightarrow \Diamond \neg P$  [Pが偶然であるならばPでないことが可能である]

と言える。

さらに,(5),(6)それぞれの対偶をとると次が言える;

(9)  $\neg \Diamond P \rightarrow \neg \nabla P$  [Pが不可能であるならばPは偶然でない]

(10)  $\Box P \rightarrow \neg \nabla P$  [Pが必然ならばPは偶然でない]

また,

(11) すべてのトートロジーは必然的である<sup>3</sup>。

ここで,トートロジーは論理法則とか論理的真理と呼ばれることがある。(11)より,同一律はトートロジーであるから,

(12)  $\Box(P \rightarrow P)$  [「PならばP」は必然的である]

これは,

(13) 同一律は必然的である

ということを表わしている。

pを個体を表示しているとする,

(14)  $\Box(p=p)$  [同一性は必然的である]

は公理である。この公理は、「すべての可能世界において同一性が成り立つ」ことを表わしている。

最後に偶然性の著しい特徴を4つ記す;その1,

(15)  $\nabla P \equiv \nabla \neg P$ <sup>4</sup>

[Pが偶然であることとPでないことが偶然であることは同値である]

その2,

(16)  $\neg \nabla \nabla P$ <sup>5</sup> [Pが偶然であることは偶然でない]

これは,

(17) 偶然は偶然生じない

ということを示している。その3, 式(2)の両辺を否定してから, その右辺にド・モルガンの法則を適用すると,

(18)  $\neg \nabla P \equiv (\neg \Diamond P \vee \Box P)$  [Pが偶然でないとはPが不可能であるかまたは必然である]

ということを表わしている<sup>6</sup>。要するに, 「偶然でないとはあり得ないことかまたは必然的である」ということを示している。その4, (2)より

(19)  $\Diamond P \rightarrow (\neg \Box P \rightarrow \nabla P)$  [Pが可能である場合, Pが非必然的ならPは偶然である]

あるいは,

(20)  $\neg \Box P \rightarrow (\Diamond P \rightarrow \nabla P)$  [Pが非必然的である場合, Pが可能であるならPは偶然である]



図 1

## [2] 九鬼周造の存在論

九鬼周造によると, 「哲学とは存在の会得であ」り<sup>7</sup>, 「存在一般の根源的会得であ」る<sup>8</sup>。「普通に存在という場合には必然的存在, 可能的存在, 不可能的存在, 偶然的存在の四つの様相が理解されている。他方にあつて現実, 非現実, 実在, 虚無の四つの形態が考えられる。この八つの存在相が如何に関係するかを見極めるところに存在一般の根源的会得の基礎がある」<sup>9</sup>。

「現実と実在とは同一ではない。非現実と虚無とも同一ではない。現実でありながら虚無を帯びているものもあるし, 非現実でありながら実在性を有っているものもある」<sup>10</sup>と九鬼は

述べた後、「現実、非現実、実在、虚無の四つの形態」を基にして、「必然的存在、可能的存在、不可能的存在、偶然的存在の四つの様相」を説明する。

必然的存在の様相は、「現実と実在とが一致している場合、すなわち実在が現実化されている場合」<sup>11</sup>である。

不可能的存在の様相は、「非現実と虚無とが一致している場合、すなわち虚無が非現実の領域に止まっている場合」<sup>12</sup>である。

可能的存在の様相は、「実在が非現実の領域に止まる」<sup>13</sup>場合、「すなわち非現実でありながら実在性を有っている」<sup>14</sup>場合である。

偶然的存在の様相は、「虚無が現実の領域へ現われた」<sup>15</sup>場合、「現実でありながら虚無性を帯びている」<sup>16</sup>場合である。

以上の事柄は、次の表1のようになるだろう；

	現実	非現実
実在	必然的存在	可能的存在
虚無	偶然的存在	不可能的存在

表 1

九鬼は、「不可能性は虚無性と非現実との一致しているものであるから存在一般の会得にとってはむしろ背景をなす場合が多い。存在一般の会得は主として必然性と可能性と偶然性との三者の関係の会得に懸かっている」<sup>17</sup>と主張して、不可能存在を除いて、必然的存在、可能的存在、偶然的存在の相互関係を論じる；すなわち、

[2.1] 必然的存在と可能的存在の関係、

[2.2] 可能的存在と偶然的存在の関係、

[2.3] 偶然的存在と必然的存在の関係。

#### [2.1] 必然的存在と可能的存在の関係

必然的存在と可能的存在の「両者は実在性を共有しているが、可能的存在は非現実的存在であり、必然的存在は現実的存在である。実在性を地盤とする限り、非現実は現実になる。可能は必然になる。可能とは必然への可能にほかならない」<sup>18</sup>。下線部分から分かるように、実在は、非現実を現実化する働きを有している。

では、なぜ実在はそのような働きを持っているのか？ なぜなら、「非現実としての可能的存在が現実としての必然的存在になるのは実在性の領域に於いて本質的な発展の経路を

通る」<sup>19</sup>からである。要するに、実在性の領域にあるものは本質的に発展する「必然性」を有している。実在性の領域においては「可能は可能の中に現実的必然性へ発展すべき素質を有している。可能性が与えられた場合には既に必然性が先取されているのである」<sup>20</sup>。例えば、実在する可能的存在である「種子は樹木への発展を予料し」<sup>21</sup>、同様に実在する可能的存在である「蕾は花への展開を先駆している」<sup>22</sup>。

以上から言えることは以下の通りである;「可能〔的〕存在は発展の概念を蔵している。そして発展の極限が必然〔的〕存在と考えられている。必然〔的〕存在とは可能〔的〕存在の発展の極限である。必然とは超可能にほかならない」<sup>23</sup>。そして、可能的存在から必然的存在への発展を媒介するのが実在である、と言えるだろう。

様相論理に基づいて簡単に説明する;ここで、 $P$  = 「存在する」とおく。主語は適当に補うこと。

$$(21) \quad \Box P \rightarrow P$$

〔実際に（実在的に）存在することは必然的に存在するための必要条件である〕

$$(22) \quad P \rightarrow \Diamond P$$

〔可能的に存在することは実際に（実在的に）存在するための必要条件である〕

これら両式は、様相論理<sup>24</sup>において真である。これらと仮言三段論法によって、

$$(23) \quad \Box P \rightarrow \Diamond P \quad \text{〔可能的に存在することは必然的に存在するための必要条件である〕}$$

(21) の後件と (22) の前件に現われる  $P$  [つまり「実在」] を媒介として (23) が導かれるが、この式は、可能的存在という種子（または蕾）が必然的存在という樹木（または花）にとって必要不可欠である」ということを示している。つまり、種子がなければ樹木が存在し得ないのと同様に、また蕾がなければ花が存在し得ないのと同様に、可能的存在がなければ必然的存在はあり得ないのである。

## [2.2] 可能的存在と偶然的存在の関係

「偶然的存在は可能的存在に対して二様の関係を有っている。」

第一は、偶然的存在と可能的存在の「両者は一致している」<sup>25</sup>。なぜならば「偶然的存在とは可能的存在の一種であり、可能的存在とは偶然的存在の一種である」<sup>26</sup>からである。偶然的存在が可能的存在の一種であるということは、「偶然は可能性である」ということである。つまり、式 (5) である。また、可能的存在が偶然的存在の一種であるということは、「可能は偶然性である」ということであるが、これには式 (20) が対応している。ただし、(20) は、可能性から必然性を排除している。このことがあるので、偶然的存在と可能的存在は「一致する」といっても、両者が同値になるわけではない。同値になれば、「一致はする」だけでなく、両者は論理的に等しくなり両者の区別が付かなくなる。九鬼はこのような偶然的存在と可能的存在の「一致」のことを「静的一致」と呼んでいる。

要するに、「偶然的存在と可能的存在が静的に一致している」ことを (5) と (20) が示しているのである。

第二は、「偶然的存在と可能的存在とは互いに相反する性格」<sup>27</sup>を有している。「偶然的存在と可能的存在とは静的に相一致しながら、動的に相反している」からである。

つまり、「可能的存在は存在の可能なるものである」が、それに反して「偶然的存在は非存在の可能なるものである」<sup>28</sup>。「可能的存在は存在可能である」というのは同一律であるから、

P = 「存在する」とおけば、

(24)  $\Diamond P \rightarrow \Diamond P$  [存在が可能なら存在は可能である]

が成り立つ。また、式 (15) から

(25)  $\nabla P \rightarrow \nabla \neg P$

が成り立ち、(5) から、Pは任意の命題でよいので、

(26)  $\nabla \neg P \rightarrow \Diamond \neg P$

が成り立つので、仮言三段論法を使って、(25) と (26) より、

(27)  $\nabla P \rightarrow \Diamond \neg P$  [存在が偶然なら非存在が可能である]

と言える<sup>29</sup>。つまり、「偶然的存在は非存在が可能である」ということである。

要するに、「偶然的存在と可能的存在が動的に相反している」ことを (27) と (24) が示しているのである。

### [2.3] 偶然的存在と必然的存在の関係

論理式 (6) から分かるように、「偶然とは必然の否定である」<sup>30</sup>。対偶を取れば、「必然とは偶然の否定である」。上記の表から分かるとおり、両者ともに現実存在するが、偶然的存在は虚無性に根ざし、必然的存在は実在性に根ざしている。「偶然的存在は不可能性の虚無性を帯びながらなお且つ可能性を媒介として現実性を占めている」<sup>31</sup>。

### [3] 九鬼周造の必然論

「哲学が驚異に発するものである以上は、哲学の先ず問題とすべき存在は可能的存在でもなければ、必然的存在でもなく、偶然的存在でなければならない。哲学は偶然的存在に対して「何故」の問を発するのである」<sup>32</sup>と九鬼は主張する。そこで偶然性に目を向けることにしよう。

さて、偶然とは必然の否定であるから、まず必然性に言及しよう。必然性を否定すれば偶然性になるからである (式 (19) の後件)。必然性は、次の三様態に分類できる；

[3.1] 定言的必然、

[3.2] 仮說的必然、



## [3.3] 離接的必然。

## [3.1] 定言的必然

「必然性とはどういうことかというに、ものの性質上の規定であるところの同一性ということ、その存在する仕方としての様相の見地から言い表したのが必然性である」<sup>33</sup>。「ものの性質上の規定」から言えば「同一性」であり、「様相の見地」から言えば「必然」であるが、「要するに、同一性という性質が様相の上では必然性である」<sup>34</sup>；

(28) 同一性 = 必然性。

換言すれば、「自己が飽くまでも自己を保ち、自己同一の形を取っている限り、その同一者は決して他の者であり得ない。そういう在り方を必然的というのである」<sup>35</sup>。したがって、「『甲は甲である』という同一律の形式が最も厳密な必然性を表わしている」<sup>36</sup>。つまり、「ものの性質上の規定である」同一性を示す等式

(29)  $p = p$

が「最も厳密な必然性を表わしている」。この等式に現われていない「必然性」を強調する場合は、

(14)  $\Box(p = p)$

という論理式になる。つまり、(29) と (14) は同値である；

(30)  $(p = p) \equiv \Box(p = p)$  .

この同値式は (28) の論理式による表現である。

さて、「『甲は甲である』という [...] 根本的な形態」は「概念と徴表との間に存する定言性である。[主語として現われる甲という---萱間註] 概念と [述語として現われる甲という---萱間註] 徴表とが共に甲である点に同一性、従って必然性が存している」<sup>37</sup>。したがって、もの(甲)ともの(甲)との間の関係を示している「甲は甲である」という命題(つまり等式(29))が定言的必然性である。

## [3.2] 仮說的必然

「『甲は甲である』という命題 [つまり定言的必然---萱間註] は「甲ならば甲である」という命題 [つまり仮說的必然---萱間註] に展開する」<sup>38</sup>。すなわち、

(29)  $p = p$

という定言的必然から、

(31)  $P \rightarrow P$  [PならばP]

という仮說的必然に展開する。(29) の左辺と右辺に現われる「p」は個体(もの)であるが、(31) の前件と後件に現われる「P」は命題である。(29) は個体同士(とはいえ同じ一つの個体であるけれど)の関係であるが、(31) は命題間の関係である。(31) は同一律であ

り、したがってトートロジーである。(11)により「すべてのトートロジーは必然的である」から、

(12)  $\Box(P \rightarrow P)$  [PならばPでなければならない]

が成り立つ。

式(31)の前件Pは「理由」を示し、後件Pは「帰結」を示すが、「理由と帰結との間に存する仮説性が「ならば」という言葉[つまり「 $\rightarrow$ 」という命題結合子---萱間註]で表わされている」<sup>39</sup>。したがって、(12)は、仮説が必然的であることを表わしているので、「仮説的必然」を示していることになる。さらに(12)と(31)が同値であることから、必然性のオペレーターを持っていない(31)も「仮説的必然」である。

### [3.3] 離接的必然

「[甲ならば甲である]という命題[つまり仮説的必然---萱間註]は「甲は甲'であるか甲''である」という命題[つまり離接的必然---萱間註]に展開する」<sup>40</sup>。

(32)  $\text{甲} \equiv (\text{甲}' \vee \text{甲}'')$  [「甲は甲'であるか甲''である」]

であるとしよう。ここで、「 $\vee$ 」は選言(または)を表わす命題結合子を、また「甲」,「甲'」及び「甲''」はそれぞれ命題を示す。この論理式(32)は、「全体[つまり甲---萱間註]と部分[つまり甲'と甲''---萱間註]との関係に基いて各部分の間に存する離接性を表わしている。甲'と甲''とは甲という全体にあって離接的な部分を構成している。そして部分である甲'と甲''との和[つまり論理和すなわち選言---萱間註]と、全体とが共に甲である点に同一性、従って必然性が存している」<sup>41</sup>。

(33)  $\text{甲} \rightarrow \text{甲}$  [甲ならば甲である]

この式の後件に(32)を代入すると、

(34)  $\text{甲} \rightarrow (\text{甲}' \vee \text{甲}'')$  [甲ならば甲'であるか甲''である]

となる。この式を同値変形すると、

(35)  $(\text{甲} \rightarrow \text{甲}') \vee (\text{甲} \rightarrow \text{甲}'')$  [甲ならば甲'であるか甲ならば甲''である]

となる。(32)を仮定すると、(33), (34), (35)は相互に同値である。(33)は仮説的必然であり、(34)は後件が離接的な仮説的必然であり、(35)はそれぞれの選言肢が仮言的である連言命題(離接命題)である。

例えば、

甲 = 「人間である」,

甲' = 「男である」,

甲'' = 「女である」

としよう。すると、(32)は、

(36) 人間は男であるか女である



(33) は,

(37) 人間ならば人間である

(34) は,

(38) 人間であるならば男であるか女である

(35) は,

(39) 人間であるならば男であるか人間であるならば女である

という風にそれぞれ読める。

#### [4] 九鬼周造の偶然論

九鬼は、「偶然は必然の否定である」(式(6)参照)という。これを九鬼による偶然性の定義<sup>42</sup>であると仮定してみよう;この九鬼による偶然性を「九鬼的偶然性」と呼び、そのオペレーターを「▼」<sup>43</sup>で示すことにしよう。すると,

(40)  $\nabla P \equiv \neg \Box P$  [Pが九鬼的偶然であるとはPが必然的でないことである]。

この定義の両辺に否定を取り二重否定を取り去ると,

(41)  $\neg \nabla P \equiv \Box P$

となる。これと(23)より,

(42)  $\neg \nabla P \rightarrow \Diamond P$

となる。この対偶を取ると,

(43)  $\neg \Diamond P \rightarrow \nabla P$  [Pが不可能ならばPは九鬼的偶然である]。

が得られる。この式は,

(44) あり得ないことは九鬼的偶然である

と読める。これは、「起こり得ないことも九鬼的偶然に起こる」という矛盾した主張である。というのは、起こり得ないこと(不可能なこと)はどんな場合であれ起こり得ない(不可能である)がゆえに、九鬼的偶然も起こり得ないからである。

したがって、帰謬法によって、定義(40)は否定される。つまり「九鬼的偶然は必然性の否定である」というのは偶然の定義ではないと言える。

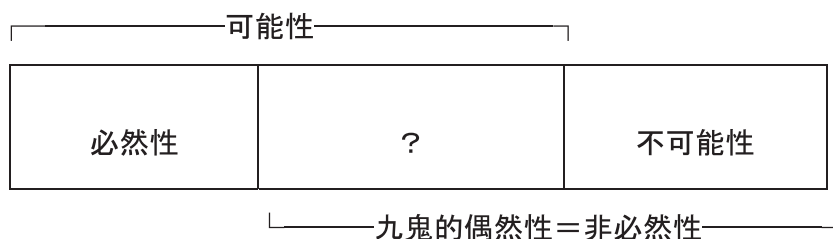


図 2

このような不都合が生じるのは、(40) のような定義では広すぎるからである。なぜならば、

九鬼的偶然性の中に不可能性までが入ってしまっているからである。このような不都合を避けるためには、九鬼的偶然性の定義中に非必然性だけでなく（不可能性を回避するために）可能性をも含めなければならない。そして、九鬼が講演「偶然と運命」の中で触れた定義(1)がそのような不都合を回避しているのである。

九鬼が(40)のような偶然性の定義を行っていたとするならば（と仮定しての上での話であるが）、「偶然的存在とは可能的存在の一種であり、可能的存在とは偶然的存在の一種である」<sup>44</sup>と述べている以上は、九鬼は偶然性が可能性を含意していること（論理式では記すと(5)）は暗黙の内に承知していたかもしれない。そして、偶然性が可能性を含意することは当然過ぎたので意識的には明示することがなかったと思われる。すなわち、まず、

$$(6) \quad \nabla P \rightarrow \neg \Box P$$

[Pが偶然であるならPは必然ではない]

である。ところで、

$$(19) \quad \Diamond P \rightarrow (\neg \Box P \rightarrow \nabla P)$$

[Pが可能であると（暗黙の内に前提）するなら、Pが必然でないならPは偶然である]と、九鬼が当然なこととして暗黙の前提とした

$$(45) \quad \Diamond P$$

から、modus ponensによって

$$(46) \quad \neg \Box P \rightarrow \nabla P \quad [Pが必然でないならPは偶然である]$$

が得られる。(6)と(46)より、九鬼的偶然性の定義

$$(47) \quad \nabla P \equiv \neg \Box P$$

が成り立つ。しかし、この式は、正しくは、暗黙の前提をも含めた

$$(48) \quad \Diamond P \rightarrow (\nabla P \equiv \neg \Box P)$$

であるが、この式は偶然性が非必然性だけでは定義できないことを示している。

したがって、今後は、

$$(49) \quad \text{「偶然とは必然の否定である」} \text{ という言明は偶然性の定義ではなく}$$

その性質を述べたものである、

と考えることにしよう。九鬼流に言えば、「偶然という概念は非必然という徴表を有している」となる。

さらに、(40)を(48)に代入すれば、

$$(50) \quad \Diamond P \rightarrow (\nabla P \equiv \blacktriangledown P)$$

[Pが可能であるならば、Pが偶然であることとPが九鬼的偶然であることは同値である]

となり、様相論理の偶然性 $\nabla P$ と九鬼的偶然性 $\blacktriangledown P$ が一致することになるが、しかし飽くまでも可能性 $\Diamond P$ が前提条件に置かれていなければならない。

(九鬼的) 偶然は必然の否定であったから、三様態の必然、定言的必然、仮說的必然、離接的必然をそれぞれ否定すると、次のような偶然の三様態が出来る、と九鬼は主張する;

- [4.1] 定言的偶然,
- [4.2] 仮說的偶然,
- [4.3] 離接的偶然。

#### [4.1] 定言的偶然

「定言的偶然は概念の普遍的同一性の包摂機能にあずからないところに生ずるものである。包摂機能は「常に」および「殆ど常に」という図式をもって営まれる。それ故にその機能に捨象された定言的偶然は「常に」および「殆ど常に」の否定として「或るときは」または「稀れに」という構造を有っている。(…)「たまたま」の語も偶然を意味すると共に「稀れに」の意味をも有っている」<sup>45</sup>。

例えば,

(51) 茶柱が立つ

という定言命題は、定言的偶然である。なぜならば、「茶柱は常に立つわけではない」のであって「茶柱は稀に立つ」からである。つまり,

(52)  $\neg \Box(\text{茶柱が立つ})$  [茶柱が立つことは必然的でない]

が

(53)  $\Diamond(\text{茶柱が立つ})$ <sup>46</sup> [茶柱が立つのは偶然である]

からである。

#### [4.2] 仮說的偶然

「定言的偶然が純粋な論理的偶然であるに対して、仮說的偶然は勝義に於ては経験的偶然であると見ることができる。さて仮說的関係の基礎をなす理由律はその根底に於て同一律に根ざすと考え得る限り、同一律と同様に必然性を有っている。然るに理由性が経験界に現象したものが因果性と目的性である。目的性は倒逆の因果性にほかならない。要するに仮說的偶然は経験界にあって因果的偶然および目的的偶然として現われている」<sup>47</sup>。

仮説文 (仮言文または条件文)

(54)  $P \rightarrow Q$  [PならばQ]

は、経験界での出来事であることを記述した因果的な仮説文や目的的な仮説文と解することができる。(55) を因果的な仮説文として読むと,

(55) Pが原因(理由)でQが帰結する

となる。例えば,

P = 「雨が降る」,

Q = 「地面がぬれる」

とすると,

(56) 雨が降るということが原因で地面がぬれるということが帰結する  
となる。(54) が目的的な仮説文として読むと,

(57) Pという目的のためにはQという手段を使用する

となる。例えば,

P = 「浦和に行く」,

Q = 「JR線に乗る」

とすると,

(58) 浦和に行くという目的のためにはJR線に乗るという手段を使用する  
となる。(55) のような仮説文を「因果的偶然」, (57) のような仮説文を「目的的偶然」と  
呼ぶことにする。ここで, 九鬼は,

「因果的偶然と目的的偶然とは各々消極的偶然と積極的偶然とに分けて考えることができる」<sup>48</sup>

と言う。これらの偶然を組み合わせると次の表2に示されているような四通りの仮説的偶然  
ができる;

	消極的偶然	積極的偶然
因果的偶然	因果的消極的偶然	因果的積極的偶然
目的的偶然	目的的消極的偶然	目的的積極的偶然

表 2

つまり, 次のような四種の仮説的偶然があることになる;

[4.2.1] 目的的消極的偶然,

[4.2.2] 目的的積極的偶然,

[4.2.3] 因果的消極的偶然,

[4.2.4] 因果的積極的偶然。

#### [4.2.1] 目的的消極的偶然

目的的消極的偶然とは, 「一つの事象に関して (… ) 目的性の非存在が消極的に目撃される  
場合」<sup>49</sup>である。さらに目的的消極的偶然には,

[4.2.1.1] 無目的としての[目的消極的]偶然,

[4.2.1.2] 反目的としての[目的消極的]偶然

という二通りの偶然がある<sup>50</sup>。

[4.2.1.1] 無目的としての目的消極的偶然は、「単に目的性を否定する場合」<sup>51</sup>である。九鬼が挙げている例（眼や宇宙の例）は私には判然としないので、私の例を使って説明してみたい。

(58) 浦和に行くという目的のためにはJR線に乗るという手段を使用する  
という既に挙げた文は目的消極的仮説文であるが、この文に対応する行動（つまりJR線に乗るという行動）を取ろうとしたときにJR線で人身事故が起こるという「一つの事象」によりJR線がストップしてしまった場合、浦和に行くという目的は図らずも「消極的に」否定されることになる。こういった際の

(59) JR線で人身事故が起こる  
という一つの事象が「無目的としての目的消極的偶然」であるのではないかと私は考える。

[4.2.1.2] 反目的としての目的消極的偶然は、「実現すべき目的を肯定すると共に、その目的の非実現を特殊の事例に於て目撃する場合である」<sup>52</sup>。

九鬼は、この反目的としての目的消極的偶然の実例として「白痴」と「四葉のクローバー」を挙げている。九鬼は、

(60) 人間にとって思考活動の存在ということが実現すべき一つの目的である<sup>53</sup>  
という。ところが、

(61) 白痴は思考活動の存在が実現されていない。  
よって、「白痴」は「偶然的なもの」<sup>54</sup>であると九鬼は言う。また、

(62) 三葉を有つことがクローバーにとって実現すべき目的の一つである  
と見た場合、

(63) 四葉のクローバーは三葉を有つという目的の実現を欠いている  
から、「四葉のクローバー」は「偶然のものである」<sup>55</sup>という。

#### [4.2.2] 目的消極的偶然

目的消極的偶然とは、「二つまたは二つ以上の事象間に（…）目的性の仮説的必然的關係の非存在を見るのみならず更に進んで積極的に他の何等かの關係の存在を目撃する場合である」<sup>56</sup>。九鬼は次のような例をあげている；

「樹木を植えるために穴を掘っていると地中から宝が出て来たというような場合である。

樹木を植えることが目的で、宝を得ることは目的の中に含まれていなかったから、宝を得たことを偶然というのである。一方に、植木屋が地を掘って樹木を植える行動の系列と、他方に、盗賊が地中に宝を隠匿した行動の系列とがあって、その各々独立した両系列間に目的性以外の何等か積極的な関係が立てられたのである」<sup>57</sup>。

私の考えた目的積極的偶然の例を述べたい。(58)をもう一度取り上げる。浦和に行くためにJR線に乗ったのであるが、乗った電車の座席のちょうど反対側の目の前の席に高校時代の旧友が座っていた。このような場合、

(64) 乗った電車の座席のちょうど反対側の目の前の席に高校時代の旧友が座っていたという事態が目的積極的偶然であろう。

この例から分かるように、「日常生活にあって偶然といわれるものの大部分はこの目的積極的偶然である」<sup>58</sup>。「目的積極的偶然には特に一種の「目的ならぬ目的」が強い陰影を投げかけているのが常である。植木屋にとって宝は「目的ならぬ目的」である」<sup>59</sup>。「高校時代の旧友」に出会うことも「目的ならぬ目的」であろう。

目的消極的偶然も目的積極的偶然も「「目的ならぬ-目的」という二肢的構造」を有つが、前者は「上肢を特に強調し」後者は「寧ろ下肢に力点を置くのである」<sup>60</sup>。

#### [4.2.3] 因果的消極的偶然

因果的消極的偶然とは、「一つの事象に関して因果性(…)の非存在が消極的に目撃される場合」<sup>61</sup>である。「因果的消極的偶然の観念は、謂わゆる不確定性原理に基いて量子力学的偶然として肯定されている」<sup>62</sup>。

#### [4.2.4] 因果的積極的偶然

因果的積極的偶然とは、「二つまたは二つ以上の事象間に因果性(…)の仮說的必然的關係の非存在を見るのみならず更に進んで積極的に他の何等かの関係の存在を目撃する場合である」<sup>63</sup>。

「公園を散歩していた人の頭に空から落下してきた隕石が命中して即死する」というような「因果系列を異にする二つの事象が一定の積極的關係に置かれた」り、「各々独立に自己の系列に於て展開する二つの因果關係が一定の積極的關係に置かれた」りすることを「偶然」という<sup>64</sup>が、この偶然が「因果的積極的偶然」である。

#### [4.3] 離接的偶然。

「「甲は甲'であるか甲''である」という命題が離接的命題であった。部分としての甲'および甲''が全体としての甲に対して有つ關係が離接的偶然である。その關係に基いて部分の偶然性はこの部分でもかの部分でもあり得るという性格を有っている」<sup>65</sup>。



離接的命題を論理式で表わすと、

(32)  $甲 \equiv (甲' \vee 甲'')$  [甲は甲'であるか甲''である]

である。そして、「部分としての甲'および甲''が全体としての甲に対して有つ関係が離接的偶然である」。例えば、

甲 = 「人間である」,

甲' = 「男である」,

甲'' = 「女である」

とすると、部分としての「男である」および「女である」が全体としての「人間である」に対して有つ関係が離接的偶然である

もう一つ具体例を示したい。

(65) 太郎は四国出身である

という命題について考えてみよう。まず、次のように略記する；

(66)  $S \equiv$  「太郎は四国出身である」,

(67)  $S_1 \equiv$  「太郎は香川県出身である」,

(68)  $S_2 \equiv$  「太郎は愛媛県出身である」,

(69)  $S_3 \equiv$  「太郎は高知県出身である」,

(70)  $S_4 \equiv$  「太郎は徳島県出身である」。

すると、次のような離接的命題を作ることができる；

(71)  $S \equiv (S_1 \vee S_2 \vee S_3 \vee S_4)$

[太郎が四国出身であるとは

太郎が香川県出身か愛媛県出身か高知県出身か徳島県出身かのいずれかである]

このとき、

(72)  $S_1$ が $S$ に対して有つ関係

(73)  $S_2$ が $S$ に対して有つ関係

(74)  $S_3$ が $S$ に対して有つ関係

(75)  $S_4$ が $S$ に対して有つ関係

がそれぞれ「離接的偶然」である。太郎が四国出身である場合、例えば太郎が香川県出身であることは離接的偶然である。なぜなら、太郎が四国出身である以上は愛媛県出身でも高知県出身でも徳島県出身でも「あり得るという性格を有っている」からである。

「離接的偶然は究竟的には形而上的背景と展望とを有って浮出て来る。離接的偶然が究竟的に成立する形而上学的次元にあっては」次のことはすべて「偶然である」<sup>66</sup>；

(76) このクローバーが三葉でなくて四葉であること、

(77) 浅間山が断層山でもなく褶曲山でもなくて火山であること、

(78) 豊臣秀吉が京都でも大阪でもなく、またその他何処でもなく尾張の中村で生れたこ

と、

- (79) 無数の異った我を含んだ無数の世界があり得たこと、
- (80) 我々はアメリカ人でもフランス人でもエチオピア人でも印度人でも支那人でも  
その他のいずれの国人でもあり得たこと、
- (81) 我々が日本人であること、
- (82) 我々は虫でも鳥でも獣でもあり得たこと、
- (83) 虫でもなく鳥でもなく人間であること。

## [5] 九鬼周造の偶然論の特徴と結論

九鬼周造の偶然論に関する特徴を三つ述べてから本論文の最終的な結論を記す。

[5.1] 「偶然性は必然性の否定である」という偶然性に関する九鬼の根本命題に基づき、九鬼の偶然論はまず必然性を考察し、次に必然性の否定態としての偶然性の考察へ、という順序で展開された。したがって、九鬼の偶然論においては、

- (84) 偶然と必然のどちらがより根本的な存在か？

という存在の間においても、

- (85) 偶然と必然のどちらが先に認識されるか？

という認識の間においても、この根本命題によって、

- (86) 必然性の否定態としての偶然性より必然性の方が優位にある

と言える。

だから、九鬼の偶然論の展開それ自体が、偶然性ではなく必然性に基づいて行なわれているのである。

- [5.2] (32) を例に取ろう。これは、

- (32)  $\text{甲} \equiv (\text{甲}' \vee \text{甲}'')$

である。この同値命題は、[4.3] 節から推測して、

- (87)  $\Box \text{甲} \equiv (\nabla \text{甲}' \vee \nabla \text{甲}'')$

[必然命題はその離接肢が偶然である離接命題と同値になる]

を含意している<sup>67</sup>。つまり、これは、

- (88) 必然命題は偶然命題を離接肢とする離接命題に変換できる

という暗黙の前提である。換言すれば、

- (89) 全体としての必然性は部分としての偶然性に分解できる

ということである。したがって、全体としての必然性がないならば、部分としての偶然性に分解できないから、全体としての必然性なしには、部分としての離接肢を偶然とする離接的偶然性もない。つまり、基礎に必然性をおき、その派生態として偶然性があるのだ。

つまり、部分的な偶然（離接肢の偶然）は全体的な必然（離接文の必然）に基礎づけられ

ているのである。

[5.3] 偶然性に関するメタレベルの考察が九鬼の偶然論に欠けているように感じられる。つまり、

(90) 偶然は、偶然生じるのかそれとも必然的に生じるのか？

といった問が欠けている。それは、

(91)  $\nabla\nabla P$ ？ [Pが偶然生じるのは偶然なのか？]

といったメタレベルの問（第一階レベルの問）である。様相論理S5によれば、

(16)  $\neg\nabla\nabla P$  [Pが偶然生じることは偶然ではない]

と否定的に答えられる<sup>68</sup>。次に、「(16) は偶然かどうか、必然かどうか？」といったメタメタレベルの問（第二階レベルの問）を問うことができる。(16) は（様相論理S5における）論理法則であったから、現実世界を含むありとあらゆる可能世界で成り立っている、だから、(16) は必然的に成り立っている。ゆえに、第二階レベルの問の答えは、

(92)  $\Box\neg\nabla\nabla P$ <sup>69</sup> [Pが偶然であることが偶然でないということは必然である]

である。

したがって、(92) から分かるとおり、第0階のレベルの偶然 ( $\nabla P$ ) を第1階レベルの非偶然性 ( $\neg\nabla$ ) が支配し、この第1階レベルにおける偶然の非偶然性 ( $\neg\nabla\nabla P$ ) を第2階レベルの必然性 ( $\Box$ ) が支配しているのである。

【結論】 [5.1] 節と [5.2] 節から、

(93) 九鬼周造の偶然論は、《必然性優位の偶然論》である

と結論づけることができる。また [5.3] 節の偶然性のメタレベルの考察によっても (93) を裏付けていると考えられるが、しかし九鬼の偶然論にはこのメタレベルの考察が欠けていたのである。

(2017年11月7日)

## 【引用文献】

九鬼周造 (1980), 『九鬼周造全集』, 岩波書店。

〔【注意】『九鬼周造全集』第X巻のY頁〕を「『全集』 X・Y」と略記する。〕

九鬼周造 (2016), 『人間と実存』, 岩波文庫。

九鬼周造 (2012), 『偶然性の問題』, 岩波文庫。

九鬼周造 (1991), 『九鬼周造随筆集』 (菅野昭正編), 岩波文庫。

Rod Girle (2009), *Modal Logics and Philosophy (2nd Edition)*, McGill-Qyeen's University Press.

「(…) 偶然ということには三つの性質があるように思われるのであります。第一に何かがあることもないこともできるようなものが偶然であります。第二に何かと何かとが遭うことが偶然であります。第三に何か稀れにしかないことが偶然であります」。

<sup>2</sup> 本論文では、「命題」と「文」は同義として扱う。

<sup>4</sup> (15) は様相論理S5の定理である (Rod Girle (2009) ,p.27。また、様相論理S5とそのタブローについては、ibid., chapter2を参照。)

(右辺→左辺) の証明は (左辺→右辺) と同様にできるので省略する。

<sup>5</sup> (16) は様相論理S5の定理である。その証明は、註69で示した式 (92) のタブローの (ハ) から始めればよい。

<sup>7</sup> 九鬼周造 (1991), p.117. [『全集』 3・106]。

<sup>8</sup> 九鬼周造 (1991), p.124. [『全集』 3・113]。

<sup>9</sup> ibid.

<sup>10</sup> ibid.

<sup>11</sup> ibid.

<sup>12</sup> 九鬼周造 (1991), p.125. [『全集』 3・113]。

<sup>13</sup> ibid.

<sup>14</sup> ibid.

<sup>15</sup> ibid.

<sup>16</sup> ibid.

<sup>17</sup> ibid.

<sup>18</sup> 九鬼周造 (1991), p.125. [『全集』 3・113-114]。ただし、下線は萱間。

<sup>19</sup> 九鬼周造 (1991), p.125. [『全集』 3・114]。

<sup>20</sup> ibid.

<sup>21</sup> ibid.

<sup>22</sup> ibid.

<sup>23</sup> 九鬼周造 (1991), pp.125-126. [『全集』 3・114]。

<sup>24</sup> 正確には可能世界の反射的な到達可能性関係が成り立つ様相論理Tまたはその拡張になっている様相論理 (例えば, S5)。様相論理Tまたはそれを拡張した様相論理については, Rod Girle (2009) ,chapter3を参照。

<sup>25</sup> 九鬼周造 (1991), p.126. [『全集』 3・114]。

<sup>26</sup> ibid.

<sup>27</sup> ibid.

<sup>28</sup> ibid.

<sup>29</sup> 式 (27) は結局, (8) と同一である。

<sup>30</sup> 九鬼周造 (1991), p.134. [『全集』 3・122] .九鬼周造 (2012), p.13 [『全集』 2・9] の冒頭で, 九鬼は「偶然性とは必然性の否定である」と記している。九鬼周造 (1991), p.155 [『全集』 3・142] 等の複数箇所と同様の表現がある。

<sup>31</sup> 九鬼周造 (1991), p.126. [『全集』 3・114]。

<sup>32</sup> 九鬼周造 (1991), pp.126-127. [『全集』 3・115]。

<sup>33</sup> 九鬼周造 (1991), p.155. [『全集』 3・142]。

<sup>34</sup> 九鬼周造 (1991), p.156. [『全集』 3・143]。

<sup>35</sup> 九鬼周造 (1991), p.155. [『全集』 3・142]。

<sup>36</sup> 九鬼周造 (1991), p.134. [『全集』 3・122]。

<sup>37</sup> 九鬼周造 (1991), pp.134-135. [『全集』 3・122-123]。

<sup>38</sup> 九鬼周造 (1991), p.135. [『全集』 3・123]。

<sup>39</sup> ibid.

<sup>40</sup> ibid.

<sup>41</sup> ibid.

<sup>42</sup> 次の記述がある：「pは偶然でない（すなわちpは必然である）」（九鬼周造 (2012), p.173. [『全集』 2・158]）。これによって、「偶然＝非必然」という定義を与えていることが分かる。

<sup>43</sup> 九鬼は「▼」の代りに「ㄣ」と「ㄩ」が（接しているのではなく）交わっている記号を使っている（九鬼周造 (2012), p.173. [『全集』 2・158]）。

<sup>44</sup> 九鬼周造 (1991), p.126. [『全集』 3・114]。

<sup>45</sup> 九鬼周造 (1991), p.138. [『全集』 3・126]。

<sup>46</sup> 正確には、(52) と同値な「▼(茶柱が立つ)」である。

<sup>47</sup> 九鬼周造 (1991), p.141. [『全集』 3・128-129]。

<sup>48</sup> 九鬼周造 (1991), pp.141-142. [『全集』 3・129]。

<sup>49</sup> 九鬼周造 (1991), p.142. [『全集』 3・129]。

<sup>50</sup> ibid.

<sup>51</sup> ibid.

<sup>52</sup> ibid.

<sup>53</sup> ibid.

<sup>54</sup> 九鬼周造 (1991), pp.142-143. [『全集』 3・130]。

<sup>55</sup> 九鬼周造 (1991), p.143. [『全集』 3・130]。

<sup>56</sup> 九鬼周造 (1991), p.142. [『全集』 3・129]。

<sup>57</sup> 九鬼周造 (1991), p.143. [『全集』 3・130-131]。

<sup>58</sup> 九鬼周造 (1991), p.143. [『全集』 3・131]。

<sup>59</sup> ibid.

<sup>60</sup> 九鬼周造 (1991), p.144. [『全集』 3・131]。

<sup>61</sup> 九鬼周造 (1991), p.142. [『全集』 3・129]。

<sup>62</sup> 九鬼周造 (1991), p.146. [『全集』 3・133]。

<sup>63</sup> 九鬼周造 (1991), p.142. [『全集』 3・129]。

<sup>64</sup> 九鬼周造 (1991), p.147. [『全集』 3・134]。

<sup>65</sup> 九鬼周造 (1991), pp.150-151. [『全集』 3・137]。

<sup>66</sup> 九鬼周造 (1991), p.153. [『全集』 3・140]。

<sup>67</sup> この含意は偽である。例えば、

甲＝「人は動物である」,

甲'＝「男は動物である」,



甲”=「女は動物である」

とくと、式(32)は真であるが式(87)は偽だからである。というのは、人や男や女は必然的に動物であるが、男も女も偶然に動物であるわけでないからである。

<sup>68</sup> 式(16)が論理法則(様相論理S5の定理)であることについては註5を参照。

<sup>69</sup> (92)は様相論理S5の定理である。

その証明は次のタブローによる。

(イ)	$\neg \Box \neg \nabla \nabla P$	(w <sub>0</sub> )	[定理を偽と置く; 帰謬法]
(ロ)	$\Diamond \neg \neg \nabla \nabla P$	(w <sub>0</sub> )	[(イ)より]
(ハ)	$\neg \neg \nabla \nabla P$	(w <sub>1</sub> )	[(ロ)より]
(ニ)	$\nabla \nabla P$	(w <sub>1</sub> )	[(ハ)と二重否定の除去より]
(ホ)	$\Diamond \nabla P \wedge \Diamond \neg \nabla P$	(w <sub>1</sub> )	[(ニ)と偶然性の定義より]
(ヘ)	$\Diamond \nabla P$	(w <sub>1</sub> )	[(ホ)より]
(ト)	$\Diamond \neg \nabla P$	(w <sub>1</sub> )	[(ホ)より]
(チ)	$\nabla P$	(w <sub>2</sub> )	[(ヘ)より]
(リ)	$\Diamond P \wedge \Diamond \neg P$	(w <sub>2</sub> )	[(チ)と偶然性の定義より]
(ヌ)	$\Diamond P$	(w <sub>2</sub> )	[(リ)より]
(ル)	$\Diamond \neg P$	(w <sub>2</sub> )	[(リ)より]
(ヲ)	$P$	(w <sub>3</sub> )	[(ヌ)より]
(ウ)	$\neg P$	(w <sub>4</sub> )	[(ル)より]
(ヰ)	$\neg \nabla P$	(w <sub>5</sub> )	[(ト)より]
(ノ)	$\neg (\Diamond P \wedge \Diamond \neg P)$	(w <sub>5</sub> )	[(ヰ)と偶然性の定義より]
┌──────────┐			
(オ)	$\neg \Diamond P$ (w <sub>5</sub> )	(ヤ)	$\neg \Diamond \neg P$ (w <sub>5</sub> ) [ (ノ)より ]
(ク)	$\Box \neg P$ (w <sub>5</sub> ) \wedge w <sub>3</sub>	(マ)	$\Box \neg \neg P$ (w <sub>5</sub> ) \wedge w <sub>4</sub> [ (オ) および (ヤ)より ]
(ケ)	$\neg P$ (w <sub>3</sub> )	(フ)	$\neg \neg P$ (w <sub>4</sub> ) [ (ク) および (マ)より ]
×		×	
[(ヲ)と(ケ)より矛盾]		[(ウ)と(フ)より矛盾]	

# **On Kuki Shuzo's theory of contingency**

## **—An approach from modal logic—**

KAYAMA, Satoru

This paper deals with Kuki Shuzo's theory of contingency. Kuki Shuzo (1888-1941) is one of Japan's famous philosophers of the twentieth-century. In the paper, from the viewpoint of modal logic we first define the concept of contingency, and secondly survey both Kuki's ontology and his theory of necessity ; and thirdly, arguing about Kuki's theory of contingency we consider whether contingency is just the negation of necessity or not. Finally, we conclude that Kuki's theory of contingency is characterized as the one in which necessity dominates contingency.